

東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター Newsletter

多言語・多文化 教育研究

Multilingual Multicultural Education and Research

URL <http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer/>

特集

多言語・多文化社会へ向けて 学生の学びと実践

Add-on Programと多文化コミュニティ教育支援室

No.10

2009(平成21)年1月

CONTENTS

- P.2…〔特集〕Add-on Programと多文化コミュニティ教育支援室
- P.6…〔連載〕4 世界の多言語・多文化 北アイルランド
- P.7…〔研究〕多文化協働実践研究・第2回全国フォーラム 報告
- P.8…〔社会連携〕第1回「つなぐ」シンポジウム 参加者募集
- 〔研究〕第5期センターフェロー募集
「多言語多文化—実践と研究」投稿論文募集
「世界の多言語・多文化社会研究」国際シンポジウム開催
- 〔教育〕Add-on Program「多言語・多文化社会」市民聴講生募集



韓国の楽器を使った「国際理解教育」

多言語・多文化化が急速に進行するなか、日本社会が抱える課題をどのように考え、その解決にあたる人材をどう育てていくのか。この重要な問いかけに対して、多言語・多文化教育研究センターは「Add-on Program」と「多文化教育コミュニティ支援室」という2つを教育活動の柱を持ち、独自の取組みをすすめてきました。

Add-on Programは、多言語・多文化化する日本社会のいまを多面的に学ぶ教育プログラムとして2006年4月にスタートし2008年10月にはすべての授業が開講されました。「Add-on」という言葉には、諸地域について学ぶ大学の既存の教育プログラムに、付加価値を創造するという意味が込められていますが、とりわけ、私たちが暮らす日本社会を基点として、多言語・多文化社会におけるさまざまな課題を考えてみようというねらいがあります。科目は「社会論入門」「言語・技能入門」「歴史と現在」「政策と法」「社会・文化」「言語とコミュニケーション」「実習」という多岐にわたった内容になっています。

一方で、まさに実践を通じてそうした課題と向きあうことができるのが、多文化コミュニティ教育支援室の活動です。地域の小中学校や学習教室で、外国につながる子ども

たちのサポートをする「日本語・学習支援」や、異文化理解・国際理解を目的とした授業プログラムを小中学校の先生たちと協力して作成する「国際理解教育」の活動は、学生ボランティアが、多文化コミュニティ教育支援室を拠点に行っています。ボランティアの登録をしている学生は、東京外大のすべての専攻語（26言語）にまたがる学部生・大学院生、計411名で、留学生（出身国：インドネシア、韓国、タイ、中国、ブラジル、モンゴル、ラオス、ロシア）も33名います。外国につながる子どもたちが暮らす地域の教育施設から支援室への依頼は増えており、参加する学生も年々増加しています。

そして「Add-on Program」と「支援室」の活動が3年目を迎えるなかで、両者がさまざまな形で結びつきあうような「小さな芽」が誕生しています。本号では、学生たちからの声を中心に、それぞれの活動の現在を紹介し本センターの教育活動が持つ可能性と展望を探ります。



外国につながる子どものサポート

多言語・多文化社会とどのようにかかわるか

—Add-on Programからはじまった学びと実践

2008年4月よりAdd-on Programの一環としてスタートした「実習」の授業。講義で学んだ知識や技能を現場で活用し、新たな学びを得る機会を学生に提供しています。これまでの実習受け入れ先としては、川崎市ふれあい館、多文化共生センター東京、武蔵野市国際交流協会などがありますが、今回は、川崎市ふれあい館で実習をおこなった4人の学生の経験にスポットをあてます。

「実習」の授業があったから一歩踏み出せた

東京外大には、教育活動の柱として学生のボランティア活動を支援する「多文化コミュニティ教育支援室」があり、学生たちに扉を開いています。けれども、この支援室に自分から出向いてボランティア登録をすることは、大学生活においてある種の冒険であるといえるかもしれません。



金田恵理奈さん

Add-on Programの実習の授業がきっかけで、現在もボランティアを続ける金田恵理奈さん（スペイン語専攻2年）は「ボランティア活動に関心はあったけれど敷居が高いと感じていた」と語ります。

ほかにも「ボランティアのためにあえて自分の時間を割くのは勇気がいることだった」（堀沙帆さん スペイン語専攻2年）、「高校時代からボランティア活動には積極的に関わってきたが、わざわざ支援室に行くのは億劫だった」（前島健さん スペイン語専攻2年）と話す学生たちにとって、Add-on Programの「実習」の授業は、ボランティア活動へと背中を大きく押すものでした。



堀沙帆さん

「実習」の授業として出かけた「ふれあい館」での学習支援活動。実習を重ねるうちに、やがて子どもたちが自分を「お兄さん」「お姉さん」として慕ってくれるようになる…。学生たちは、ボランティアを通じて今まで知らなかった世界に足を踏み入れ、教えることの楽しさを身をもって感じるようになっていきます。



前島健さん

せっかくの出会い、このまま終わらせてしまうのはもったいない

約半年の実習期間を終えた金田さんたちは「これからもっと仲良くなれるチャンスがあるのに、これで終わらせてしまうのは惜しい」「教えることが本当に楽しくて、子どもたち一人ひとりと仲良くなることができた」「はじめは義務として通っていたけれど、実習が終わったからといってやめるのはもったいない。これから新しくみえてくることもあるはず」という今後への期待感をもった一方で、子どもたちが置かれている厳しい状況を知り「自分がそこにいることで役に立てるなら」と感じたそうです。「実習」の授業の終了は、学生たちにとってボランティア活動の始まりだったのです。

友達の存在は大きい—「専攻語」というネットワーク



中谷智美さん

東京外大ならではの「専攻語」のつながりも、活動の輪を広げるうえで重要な要素となっています。中谷智美さん（スペイン語専攻2年）は、クラスメイト3人から勧められ、昨年の秋から、実習の授業でふれあい館に通っています。同じ専攻語どうしは学校ではよく顔を合わせますが、折りにふれ皆がふれあい館や子どもたちの話をしてるので、自然と興味が湧き楽しそうだなと感じていた、とのこと。「ボランティアをやりたいと考えても、思っていたより場所が少ないし、自分では探せない。知り合いがいればやる人は多いと思う」という中谷さんの言葉にも表れているように、すでにボランティアを経験している身近な友達の存在は心強く、参考になったようです。

新しい世界とつながること

「ふれあい館に行く日が楽しみ」と語る学生たちにとってボランティアは、いまや特別なものではありません。授業があって、バイトがあって、ボランティアがあるというように、生活の一部としてごく自然に溶け込んでいます。そして「自分がやりたいから活動をしている」ということや、「誰かの役に立つことで自身の存在意義を感じるようになってきた」ことは、ボランティア活動を通して得られた以前との大きな違いのひとつだったそうです。また、地方から大学進学のために上京した学生にとっては、自分が住んでいる地域と大学以外の世界が広がるよい機会にもなりました。



Add-on Program「政策と法」授業



Add-on Program「入門」グループワーク

子どもたちに必要な日本語や母語について考えたり、言葉を通して信頼関係をつくっていくことの大切さを改めて認識したりするなかで、キーワードとなるのは「つながり」です。「ふれあい館にいつも来ている子がいないと『自分はわざわざ来たのに』と思うよりも『大丈夫かな』と気にかかってしまう」。「せっかく出会えたのだからもっと自分を知って欲しいし、もっと子どもたちのことを知りたい」。子どもたちとの関係づくりは決して簡単なことではなく、また学習支援の方法にも正解はありませんが、ともかくも活動を続けること、それが彼らの出した答えなのです。

知識と現実とは別もの、でも知らないはだめだと思おう

すぐに自分たちを受入れ、慕ってくれる子どもたち。けれどもボランティア活動を通して見えてくるのは、決して楽しいことばかりではありませんでした。子どもたちの口から、あるいは周囲から教えられる、彼らを取り巻く環境の厳しさは、たとえば外国につながる子どもたちの進学など、その背後にある制度上の問題を浮き彫りにします。子どもたちとふれあうようになってから目の当たりにした現実に、自分自身がこれまで経験してきたものとの違いを感じずにはいられません。また、子どもたちと接するのに、どこまで背後の問題に踏み込んでよいのか戸惑うこともあります。そんなとき、Add-on Programのある授業で聴いた「そのまま受け止める」

という先生の言葉が、とても役立ったと言います。また「フィリピン語とスペイン語をもっと勉強しなくては」、「(子どもたちの母語である) タガログ語がわかるようになりたい」など、語学学習への意欲がさらに湧いたということでした。

他方で、授業で学んだ知識から、「厳しい状況にある子どもたち」というようなイメージを持ってしまった学生もいたようですが、実際にふれあい館で出会った子どもたちはとても元気で明るく、興味のある遊びやテレビ番組について話すその様子は、日本の子どもたちとなんら変わりありません。事前に学習したことと、実際に「現場」に行ってみるとは違うのだと、身をもって経験したそうです。そして、子どもたちの笑顔のさらに向こうにあるものをきちんと考えようとする時に、授業で学んだことは役に立つのではないかという感想も聞かれました。「自分はまだ実習の授業は始まったばかりだけど、現場にふれて自分なりの発見があったら、授業で学んだようなことを知っていることで捉え方は違わず」と中谷さんは考えています。

また、年々外国人住民が増加し、多言語・多文化化が急速に進んでいる川崎という街のようすも、学生たちにとってはとても印象的だったようです。東京外大のある府中から川崎まで、学業のあいまに列車で1時間半の道のりを費やして通うのは、大変なときもあります。しかし、さまざまな背景をもった人びとが共に暮らすことの難しさや問題の大きさが目に見えてわかるからこそ、ここから逃げ出したいくない、ふれあい館にもっと関わりたいという強い気持ちが生まれてきたということです。

多言語・多文化化する現代日本におけるリアルな現実と向きあうこと、そして手探りながらも共に生きること—それが他にはない「実習」という授業が持つ醍醐味です。しかし、これはあくまでもきっかけにすぎません。多言語・多文化社会のひとつの側面に積極的に関わろうとしている学生たちにまだ見えていないもの、これから見えてくるであろうものを一緒に探求してゆく、それがAdd-on Programと多文化コミュニティ教育支援室の役割といえましょう。

次ページではAdd-on Programと支援室を拠点とする教育活動を、それにかかわる大勢の人たちの声をもとに紹介します。

川崎市ふれあい館

ふれあい館は、もともと在日コリアンが数多く暮らしていた川崎で、日本人と在日外国人の川崎市民が、相互に交流をすすめる場として1988年に設立されました。

子どもから高齢者まで「誰もが力いっぱい生きていくために」をモットーに、学童保育や識字学級、文化講座など、幅広い活動を展開しています。

近年のフィリピン、中国、タイ、ボリビアなどからのニューカマーの増加にともない、外国につながる児童・生徒への学習サポートを行っています。「DAGATクラブ」では、日本で生まれ育ちフィリピンを背景に持つ子どもたちが、フィリピンのことや文化を学んでいます。

ふれあい館 神奈川県川崎市川崎区桜本1-5-6 電話 044-276-4800

URL <http://www.seiky-sha.com/>

ふれあい館職員より

東京外大の学生さんは語学が堪能な上、Add-on Programを通じて多言語・多文化社会について学んでいることもあって、心構えや知識の点でも質の高い活動をおこなってくれていると感じています。

初めに実習の授業を通して参加され、その後もボランティアとして活動を継続している方々については、子どもたちと真剣に向き合い取り組んでくださることを心から感謝しております。活動は学習面のサポートが中心ですが、子どもたちの心、悩みを受け止めることもとても重要です。これからも「若さ」と「語学」を活かして子どもたちとふれあってください。(原千代子さん)

Add-on Program 「多言語・多文化社会」の現在

基礎部門、理論部門、言語技能部門などの各分野にまたがるAdd-on Programは、学生の興味関心に応じてある一つの授業のみを聴講することもできますが、同時にいくつかの、さらに次の年に別の授業を履修することによって、もっともその効果を発揮するものです。

例えば、「外国人住民と医療」というテーマをめぐるのは、ある授業では受入れる病院側の視点から制度上の問題が指摘され、また別の授業では日本語が不自由な患者のサポートをする医療通訳者の視点から、コミュニケーション上のさまざまな課題や問題点が掘り下げられます。また、例えば外国人住民が数多く住む新大久保という地域に関しては、一方では地域住民としての外国人の立場から共生にむけてのさまざまな試みが、他方では、日本の公立学校で教育に携わる教師としての立場から、外国につながる子どもたちの心の葛藤が語られます。ここから見えてくるのは、年々受入人数が増加する「外国人」が、単なる労働力ではなく、共に暮らす生身の人間であるという重大な事実です。

こうして、各授業で扱われるトピックが網の目のように結びつき、多言語・多文化社会における課題が総体として浮かび上がってくる、また、学んだことや課題をディスカッションやプレゼンテーションを通じて自分の言葉で表現できる…。それがAdd-on Programの持つ魅力であり、一人一人をより具体的な実践へとひらいていく芽を生み出しています。

授業をきっかけに日本語学習支援や国際理解教室の学生ボランティアの活動に興味を持ち、その実践のなかで感じた疑問や発見を、また授業を通して深く見つめ直す…。そのような双方向の刺激が教育活動としてますます実を結んでいくことを私たちは願っています。

【「入門」の授業を担当する青山亨先生から】

現場で活躍する実践者をゲストにお招きしているので、新入生が主体の「入門」の受講生にとっては一つ一つの講義がとても新鮮な刺激に満ちているようです。グループディスカッションのあとの質問やコメントに含まれた鋭い視点を見るに付け、そのことを感じます。受講生の中に外国とつながる人たちが多く、学生たちに、足もとでおこっている日本の多言語・多文化化に注意を向けさせる要因となっているようです。



学生ボランティアがつくるプログラムによる 高校生のための国際理解セミナー

本学オープン・アカデミーが主催し、多言語・多文化教育研究センターが運営した「高校生のための国際理解セミナー」（第2回）が、2008年7月27日（日）に開催されました。多文化コミュニティ教育支援室で活動する学生ボランティアが中心となって企画したこのセミナーには、全国から46名の高校生が参加し、国際理解や多文化共生の意味についてともに考え議論しました。

企画・運営に関わった学生の声—私たち東京外大生が伝えたいこと

「初めて関わったが、自分自身学ぶことも多かった。こういう活動をもっと在校生にも知ってほしいし、東京外大生同士でも互いに学び合っていきたいと思った」

「参加者の高校生には、東京外大＝外国語・文化というイメージをくつがえしてほしい。いろんな視点をもつことの大切さを感じてほしい」

「このセミナーを通して、自分の引き出しが増えていることに気付いた。議論していても、現場での経験を通して自分のことばで話せることがたくさんあるし、伝えたいことがどんどん出てくる」

多言語・多文化化する社会の 多文化コミュニティ

外国につながる 子どもたちへの 日本語・学習支援

小中高校や地域の学習教室などにボランティアとして参加します。大学で学んでいる語学を活用しながら、子どもたちに日本語を教えたり、学校の勉強をサポートしたりします。母語で話す日本語を話していた時とは様子がすっかり変わる子どもたちもいます。自分の国の文化やことばに興味を持っている学生たちの存在は、子どもたちにとってかけがえのないものなのです。子どもたち

もし学生ボランティアのお兄さんお姉さんがいなかったら…困る。だって一人じゃさびしい。



学生ボランティアの声

教科書の文章って普段の会話では使わない言葉ばかりだ…
避難訓練はイランにはないんだ！教科書の文章って普段の会話では使わない言葉ばかりだ…。学習支援をしてから、日本語や日本を再発見するようになった。バシャバシャってどうということ？鯉のぼりって何?! そんな時は母語で説明したり、教材を工夫したりして、子どもと一緒に問題に取り組んでいる。

保護者の声

国語の教科書を、学生ボランティアの方と一緒に読んで、話が理解できたことを子どもが喜んでいました。今後も宿題などを助けてもらいたい。

専門員からの一言

◆学習支援専門員 河北祐子

学習支援に関わる学生ボランティアは異口同音に「子どもが好き、子どもは可愛い」と言います。いろいろ悩みを抱えていても、会うと明るく飛びついてきたり、話しかけてくる子どもたちによって学生も自分の存在の意味を実感できるのだそうです。支援という一方通行の関係ではなく、互いが関わり合うからこそ学習支援の魅力だと言えそうです。そんな活動を通して日本社会のあり方、ひいては「共に生きる」ことについて考え、学んでいく学生の姿に頼もしさを感じる日々です。

多言語・多文化教育研究センターでは、Add-on Program 多文化化の状況を学ぶとともに、多文化コミュニティへ出かけて行ってその現実と向き合う機会を提知ったことを自分の目で確かめたいと考え、日本語「ボランティア」ということばに興味を持って支援

現実と向き合う 教育支援室



子どもの母語を使った学習サポート

ボランティア活動に取り組む学生たちの支援基地

本学では、学生がボランティア活動を通じて地域社会や教育現場の多言語・多文化状況を知り、学ぶことを支援する「多文化コミュニティ教育支援室」を設置しています。これまでに600人以上の学生がボランティア登録をし、それぞれの専攻語など大学で学んでいることを実際に社会で活かすことによってさまざまな経験を積んでいます。

http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer_mclsc/ja/



小中学校での 国際理解教育

日本人学生と留学生がチームを組み、小中学校で国際理解のための授業を行います。

子どもたちに他国の文化を伝えるだけでなく、そこに生きる人の思いを伝えたい。「国」よりも「人間」に興味をもって国際理解を進めてほしい。そんなメッセージを込めて、学生たちは、地域の小中学校の先生や多文化コミュニティ教育支援室のスタッフと一緒に時間と手間をかけ授業の準備をします。



外国語だけの模擬授業を体験する子どもたち

子どもの声



今のままのお兄さん、お姉さんがいい。これからも一緒に勉強したい。

(府国際交流サロンに通う子どもたちへのアンケートより)

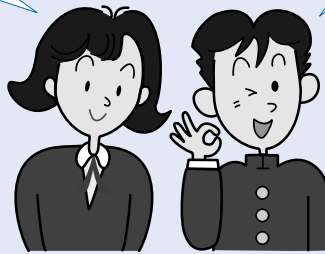
活動を通して

さまざまな声から見えてくるもの

今まではテストに出るからとか発表があるからという理由で、文化の知識を頭に入れてきただけで、今回の講座で「他人のため」「自分のため」に理解することができたと思う。何より、人とのコミュニケーションの大切さと自分の勇気でどれだけ自分の世界が広がるか実感することができた。

(高校生の声)

子どもたちの声



留学生が初めて日本に来た時の話をしてくれて、大事な「心の言葉」と言っていたのがとても印象に残っている。それがあれば、言葉の壁は越えられるんだなあと思った。

わからない言葉での模擬授業は、たったの5分だけでとても長く感じた。もし自分一人だったら不慣れな気持ちになっていたろうし、日本に初めて来た人たちはそんな気持ちになるのかな、とも思った。

(中学生の声)

学校一担当教員の声

学習支援を受けて、子どもたちが変わったこと

- 子どもが自分の考えを表現するようになった。
- 学生ボランティアは、児童にとって精神的な励みとなり学校生活に潤いを与えてくれる。また、児童、担任、保護者の関係をスムーズにするコミュニケーションの橋渡し役の役割を担ってくれる存在となっている。

子どもたちの今の様子は？

- 日常会話で自分の思いを伝えることがうまくなり、児童間のトラブルが減り、楽しいコミュニケーションがとれるようになった。
- 学生ボランティアが来ることをいつも楽しみにしている。

学生ボランティアの声

アイデアを実行に移していく難しさ

アイデアを出すだけでなく、それを実行に移すまで時期を見ながら企画をつめていくのは、想像以上に難しく、戸惑うばかりだった。これからも、子どもたちが「自ら考える」きっかけを残していきたい。

学校一担当教員の声

- 今回の授業は、教員にとっても新鮮でとても学ぶべきところが多い授業だった。大学生たちが主体になって行っているので、「何かを教える」というのではなく、「一緒に考える」雰囲気うまれ、子どもたちにとってもよかったと思う。
- ふだんは暗い顔をしていた男子が、学生ボランティアに甘えていた姿がとても印象に残った。

専門員からの一言

◆国際理解教育専門員 木下理仁

学生たちの活動を見ていて、いつも思うのは、それぞれの持ち味を活かしたチームワークの良さ、そして、いつも同じプログラムを“出前”するのではなく、その都度、アイデアを出し合いながら、力を合わせて“一発勝負”のプログラムを作ることから生まれる、すごいエネルギーです。スポーツの名勝負ではありませんが、同じメンバーで同じことをもう一度やっても、同じ結果が得られるとは限らないだろうと思わせる、1回限りだからこそその感動があります。高校生向けセミナーの実践を「青春の1ページ」と表現した学生がいましたが、私も、まさにそんな気がしています。

programを通じて日本の地域で進む多言語・多文化コミュニティ教育支援室の活動を通じて、学生たちが提供しています。Add-on Programの授業で多言語・学習支援の活動を始める学生もいれば、支援室の扉を叩く学生もいます。動機や入口は

人それぞれですが、自分が感じたことを周りの仲間と話し合ったり、子どもたちにメッセージを伝えるためにいろいろな工夫をしたりする中で、これからの社会の頼もしい担い手として、着実に育っていこうとしています。本センターでは、今後 Add-on Program と支援室の活動をより積極的につなげることで、こうした学生たちの学びを後押ししていきたいと考えています。

連載 4

世界の多言語・多文化

「世界の多言語・多文化社会研究推進プログラム」の実施にともなって、本学教員が執筆していきます。第4回目は北アイルランドです。

北アイルランド

ゆん・へよん (多言語・多文化教育研究センター / 外国語学部准教授)
尹慧瑛



「北アイルランドについて研究しています」と言うと、たいていの人が「どうしてまた?」と興味を持って尋ねてきます。北アイルランドがどこにあるのかすらなかなか認知されていない一方で、「IRA」や「テロ」「紛争」というイメージばかりがニュースや映画などを通して流布しているので、余計に不思議に思われるのでしょう。

北アイルランドは、ブリテン島の海を挟んだ西側にあるアイルランド島の北部6州にあたる地域です。地理的にはアイルランドの一部なのですが、行政的には連合王国に組み込まれたイギリス領です。日本では一般に「イギリス」という呼称を用いるので忘れがちですが、「グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国」という正式名称や、アイルランド旗を含んだユニオン・ジャックのデザインは、北アイルランドがイギリスとアイルランドの植民地関係の歴史的所産であることを物語っています。

数世紀にわたってイングランド／ブリテンの支配下にあったアイルランドが1922年に自治を獲得した際、入植者の子孫であるプロテスタント系住民が多数派を占める北部6州は、イギリス領に残留することになりました。これが、今日の北アイルランド問題の起源です。

その後の北アイルランドの体制は、プロテスタント勢力の支配下におかれ、選挙権、雇用、住宅の割り当て、教育などのさまざまな領域において、カトリック住民に対する差別的な政策が実施されました。

1960年代末に登場するカトリック住民を中心とした公民権運動は、そのような状況に対する「異議申し立て運動」でしたが、デモ行進などでの度重なる衝突によって両派の緊張が高まるなか、北アイルランドは紛争へと突入することになります。紛争における暴力の主体は、両派の武装組織や地元警察、



公民権運動を伝える壁画 (カトリック地区)

治安維持の名目で派遣されたイギリス軍など、合法／非合法にかかわらず武器を持つ人びとでありながら、死亡者・負傷者の半数以上は一般市民でした。



毎年7月に行われるパレード (プロテスタント地区)

「二つの歴史」「二つの文化」「二つの伝統」を主張する北アイルランドは、しばしば「分断社会 (divided society)」であると言われます。長期にわたって日常化した暴力は、両者のあいだにもともと横たわっていた分断をよりいっそう推し進めたのです。日本ではよく北アイルランドにおける対立を「宗教紛争」と表現しますが、対立の原因は宗教にあるのではなく、居住区、教育、雇用、婚姻などによって「二つのコミュニティ」が再生産されてきたことにあります。そしてそれがさらに紛争を支えていくという負の連鎖を生み出していったのです。

出口が見えないかのようなだった北アイルランド紛争は、しかし、1990年代に入って新しい局面を迎えました。1994年の両派の武装組織による停戦宣言と、それに続く1998年のイギリス・アイルランド両政府による和平合意は、北アイルランド社会に大きな期待をもたらし、一進一退を繰り返しながらも「社会の共有」への道を歩み始めています。

ところがピース・プロセスが進展を見せ始めるなか、いれかわるように顕在化してきたのが、エスニック・マイノリティへの差別や暴力でした。数としてはまだ全人口の1%にも満たないものの、中国、インド、パキスタンなどのイギリスの旧植民地からの移民や、東欧諸国などからの外国人労働者の存在は、これまで「二つのコミュニティ」という視点からでしか捉えられることのなかった北アイルランド社会のあり方に大きなインパクトを与えつつあります。

北アイルランドが目指す「社会の共有」とは、プロテスタントとカトリックの二項対立の克服だけでなく、あらゆる差異を含み込むものでなければならない——現在北アイルランドでは、このような視点に立って新しい社会づくりに向けてさまざまな努力がなされています。長年にわたって暴力を経験した北アイルランドだからこそできる多言語・多文化状況への取組みがあるのではないかと。それが、私が北アイルランドに関心を持ち続けている大きな理由のひとつです。

「多文化社会の課題解決に向けて—協働実践研究活動の成果・課題・展望」 多文化協働実践研究・全国フォーラム（第2回）—研究成果発表の3日間

第2回全国フォーラムが、2008年11月28日から30日まで本学で催されました。

「多言語・多文化状況に関して研究者と実践者が協働で実践研究を推進する」という画期的な試みでスタートした本センターの多言語・多文化協働実践研究プログラムも2年が経過。多文化社会における課題解決のための方法として「協働」を重視し、そのプロセスを積み上げてきたとも言える本プログラムの、実質的な成果発表の場となりました。3日にわたって、2回の全体会をはじめ、6つの分科会ほか8グループの発表・15個人発表、展示などの会場に、411名が参集しました。

全体会のパネルトークでは、2年間行ってきた班別の活動が総括的に発表され、分科会では、テーマ別に協働実践研究の成果の発表が行われました。

最終日の全体会では、「多文化社会に求められる人材の専門性とその力量形成 —『多文化社会コーディネーター養成プログラム』の取り組みから—」と題してパネルトークが行われました。最初に専門職としての力量形成のあり方についてD・ショーン『省察的实践とは何か』の監訳者である三輪建二さん（お茶の水女子大学教授）から、また本センターで実施している「多文化社会コーディネーター養成プログラム」について、杉澤経子プログラムコーディネーターから発題がなされ、さらに3名の受講者から講座を受講した感想が述べられました。それを受けて、北協保之センター長（本学外国語学部教授）、小平達也さん（株式会社ジェイエーエス代表取締役社長）、佐藤郡衛さん（本学特任研究員、東京学芸大学国際教育センター教授）、山西優二さん（本学特任研究員、早稲田大学教授）の4名のパネリストから、それぞれ専門とする視点からの意見が出され、多面的な協議が行われました。

本センターでは昨年8月に「多文化社会コーディネーター養成講座」を開講しましたが、今年2009年度もこのパネルトークでの議論を踏まえてさらに精査した内容で第2期を開講します。当日の参加者にもひろく受講を呼びかけ、全国フォーラム第2回は閉会しました。

5つの班における協働実践研究活動は今年度で終了となり、次年度からは協働実践研究プログラムの第2ステージとして新たな体制で活動が始まることとなります。

なお、今年度の各班の研究成果は『シリーズ 多言語・多文化協働実践研究』のNo. 7～11として発行していきます。また、3日目のパネルトークの内容についても、報告書にまとめ希望者に配布する予定です。

（詳細は本センターHPで後日ご案内します）

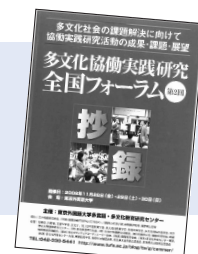


最終日の全体会 パネルトーク

【第2回・全国フォーラム】日程

セッション	テーマ	参加人数
11月28日		
分科会（1） 教材開発チーム	在日ブラジル人児童むけ教材開発プロジェクトの成果と今後の展望	83
分科会（2） 阿部・井上班	第二世代育成を核とした上田モデルの構築にむけて —「こころ」「コミュニケーション」「キャリアデザイン」を支援するプログラム	99
11月29日		
全体会	パネルトーク「協働実践研究の成果と課題そして展望」	116
分科会（3） 山西・小山班	多文化社会に求められるコーディネーターの専門性形成にむけて	103
分科会（4） 野山班	地域日本語教育プログラム —その充実へ向けた協働実践の在り方について考える—	70
懇親会	ネットワーキング	71
11月30日		
分科会（5） 渡戸・関班	市民・行政の協働と広域連携の可能性 —町田市・相模原市の政策づくりの実践から	70
分科会（6） 佐藤・金班	外国につながる子どもたちの教育を地域から育む試み —地域、学校、行政、当事者の協働実践モデル構築を目指して—	113
全体会	パネルトーク「多文化社会に求められる人材の専門性とその力量形成」 —「多文化社会コーディネーター養成プログラム」の取り組みから—	175

第2回全国フォーラム抄録（A4版・123頁）をご希望の方に差し上げます。
本センター「全国フォーラム抄録」係までお申し込みください。
※数に限りがありますので配布部数はお一人様1冊とさせていただきます





「つなぐ」シンポジウム —第1回 参加者募集!

東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターと東京学芸大学国際教育センターは、「つなぐ」というキーワードを念頭に置いて、継続的なシンポジウムを企画していくことになりました。

人づくり、地域づくりという観点から多文化社会日本における教育が果たすべき役割を考えていく試みの一つとして、参加者全員で「つなぐ」という共通の課題をめぐり、論議・探求し、協働する場を構成します。また、本シンポジウムは、一方向的な課題提起にとどまらない、双方向・多方向的な課題の共有を行い、多文化社会での教育の役割を理論的、実践的に検証していきます。さらに、課題の解決へとつなげていく一連の流れを主体的な参加者に体感していただくことをめざします。

テーマ：多文化の子どもをつなぐ「場」づくりをめざして
—学校から、地域から、学びの協働へ—

日時：2009年3月28日(土) 13:00～17:00
場所：東京学芸大学 国際教育センター1階 会議室
定員：60名

参加料：無料

事例発表者：三田善雄さん(武蔵野市国際交流協会コーディネーター) 三原英喜さん(福岡市教育大学附属福岡小学校副校長、元香椎浜小学校校長) ほか

主催：東京学芸大学 国際教育センター
東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター

【主旨】

多文化の子ども(外国につながる子どもなど)を受け入れる上で、学校と学校外との協力を進めるための諸課題について検討します。今後、「つなぐ」という共通テーマでのシンポジウムを年1回程度開催していく予定です。様々な立場(教師・学校関係者、NGO、NPO、行政、国際交流協会)の方々と、ワークショップなどを通して共通の課題を見いだしながら、次年度以降におけるテーマ化をも想定して議論を深めていきます。



申込み：E-mail c-event@u-gakugei.ac.jp

お問合せ：

東京学芸大学国際教育センター事務局

電話 042-329-7727

http://crie.u-gakugei.ac.jp/event/event_08.html#tsunagu01

お知らせ 詳細は当センターHPをご覧ください



第5期 センターフェロー (2月28日必着)

【研究】

「センターフェロー」制度は、国内外の研究機関に所属しない新進研究者および実践者に、センターフェローとしての身分を保証することでその研究活動を支援するとともに、本センターの活動の活性化を目指すものです。非常勤・嘱託等の身分で研究機関に所属している方も応募できます。

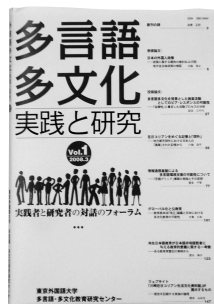
●『多言語多文化—実践と研究』 投稿論文募集

【研究】

多言語・多文化化にかかわるさまざまな課題に取り組む研究者および実践者による投稿論文を広く募集します。

投稿論文は、対象とする地域にかかわらず、現代日本における多言語・多文化化の考察に貢献するものとします。また、従来のいわゆる「研究論文」に加え、「実践型研究論文」というカテゴリーをあらたに位置づけました。

字数は25000字以内で、原稿の投稿締切りは2009年3月末日です。



●『世界の多言語・多文化社会研究』 国際シンポジウム開催

【研究】

トランスナショナル/トランスカルチュラルな比較地域研究—多言語・多文化社会のもとでの新たな大学教育に向けて—

日時：2009年2月14日(土)、15日(日)

会場：東京外国語大学 研究講義棟 227教室

予告

【教育】

2009(平成21)年度 東京外国語大学 市民聴講生制度プログラムで本号で特集した「Add-on Program」の一部を聴講できます。詳しくは、開講前に本センターHPでお知らせします。

発行 東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 研究講義棟319号室

Tel 042-330-5441 Fax 042-330-5448

E-mail tc@tufs.ac.jp

URL <http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer>